
「夢でもいいから」 （続続・同窓会で逢おうね）

桜坂 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「夢でもいいから」 （続続・同窓会で逢おうね）

【Nコード】

N5241E

【作者名】

桜坂 恵

【あらすじ】

紆余曲折を経て、藤川とカヨは、入籍した。一方、祥子は、最愛の母親との突然の別離という哀しみを、ようやく少し乗り越えつつあった。俺は、そんな祥子を、以前にも増して、愛おしく思っていたが・・・

1・（前書き）

拙作「同窓会で逢おうね」「陽炎の向こう側」と続いた3部作の、最終章です。

前作を、まだお読みでない方は、ぜひ「同窓会で逢おうね」からお読み下さいますよう、お願いします。

読後に、感想・評価などいただけたら、幸いです。

「では、えーっと、・・・まあ、ともかく、すごくおめでとう。乾杯。」

「なんだ、それだけなの？・・・まつ、いいか。かんぱーい。」

藤川も、そして、今日、晴れて、藤川の妻となったカヨも、満足げな表情で、ジヨツキを掲げてくれていた。

今日の昼間、藤川とカヨは入籍をした。

一緒に暮らして、もう一年半になるのだから、随分と遅かったとも言えるが、当人達には色々と事情もあったのだろうし、今日、無事に入籍を済ませたことを、俺は心の底から祝ってやりたかった。隣に座っている祥子も、同じ気持ちでいるのは間違いなかった。

今夜は、いつもの店で、四人だけの祝宴だった。

少し前、藤川が転職し、勤務時間が不規則になった。そのために、最近は、

以前のように四人一緒に会うことは、なかなか出来なかったから、今日、

こうして四人で飲めることを、祥子はことのほか喜んでいた。

「カヨ、ほんと良かったね。色々あった分、幸せにしてもらいなさいよ。」

「アキヒコ、カヨを泣かせたりしたら、パUNCHでは済まないからね。」

祥子はカヨに笑いかけながら、藤川の鼻面にこぶしをぶつける仕草をしてみせた。

「わかったよ。はいはい、了解です。」

藤川がそう応えようと、祥子は、

「ハイは一回でいいの。」と言いながら、今度は藤川の少し立派になった腹に向けて、こぶしを当てた。

「わあ、いやだ。ここ、埋まるよ。」

祥子の明るい笑い声を、俺は久しぶりに心地よく聞いていた。

祥子の母親が倒れたのは半年前。年末がすぐそこに迫った寒い朝。

肝臓ガン。ほとんど手の施しようがなかった。祥子の懸命の看護で、一時期、

容体は持ち直したが、それでも、倒れてから三ヶ月足らずで、帰らぬ人となった。

父親を早くに亡くしていたから、祥子の哀しみは、あまりにも深かった。

母親の入院中、祥子は、一日のうちの大半の時間を、病院で母親と過ごした。

出来るだけ、母親と一緒に居たかった。そんな中でも、祥子は、家事一切を完璧にこなし、

夫や子供達に、普段と変わらぬ生活をさせた。

掃除、洗濯、その他、家事は夜半に及んだ。

俺は祥子が心配だった。三ヶ月、このままでは、祥子が倒れてしまふと思われ、

祥子自身も限界を感じ始めた頃、母親は、

「祥ちゃん、ごめんな。世話をかけたね。ありがとう。」と言い残して、静かに逝った。

母親の葬儀には、他の同窓生に混じって、参列させてもらった。

焼香の時は、

わざと祥子を見ないようにした。祥子も顔をあげなかった。

葬儀の終わりに、喪主となった弟と並んで立った祥子は、魂をどこかに置き忘れて

きたように見えた。祥子の娘二人も、その時始めて見た。母親似の活発そうな娘達

だったが、ただじつとうつむいて、受け入れがたい祖母の死を、やり過ぎそうと

しているようだった。旦那も目にしたはずだが、どんな人だったか、何故か全く記憶にない。

母親が倒れてから、亡くなるまでの三ヶ月間、祥子とゆっくり過ごすことはなかった。

週に一、二度、病院の近くのファミレスで、昼食をとったが、一時間居られなかった。

祥子は、実家の掃除にも、手を抜かなかった。

母親は、娘が綺麗に保った家に、一晚だけ外泊許可で戻って来たが、それっきり、二度と戻れなかった。

祥子が、夜半に実家の掃除に行くとき、俺は何度か近くまで出向いた。

そんな時は、車の中で、少し話した。俺が出向く目的は、ただ一つ、祥子に

泣かせてやるためだった。

母親が逝ってしまうという怖さ、

奇跡を待ち望む気持ち、

もう泥のように重く、疲れの溜まった身体。祥子は押しつぶされていた。

泣けばいいよ

実家近くの路上の暗闇の中、狭い車内で、祥子は声を殺して泣き、俺はいつも、ただじっと祥子を抱きしめていた。

母親の葬儀から、三ヶ月。祥子は、やっと気持ちの整理がついた様に見えた。

屈託なく笑う顔に、本来の明るさが戻ってきていた。

「あの湯豆腐が食べたいなあ。」祥子がそう言ったのは、もうそろそろ帰ろうかと
言っていた時だった。

もう、三年近く前になる。京都・嵐山へ、四人で一緒に出掛けた。そこで、湯豆腐を食べた。祥子はあの店のことを言っていた。

「おう、それいいなあ。行こう。」

「夏に湯豆腐か。面白いな。」

「いや、意外と旨いぞ。」

「いつ？」

「来週の土曜日はどう？」

「OK。問題なし。」

「でも、来週は、ずっと雨みたいよ。」

「そう？でも、大丈夫。祥子パワーでお天気にするって。」

「梅雨のど真ん中だぞ・・・まあ、湯豆腐を外で食おうって話じゃないからな。」

「お天気はともかく、来週の土曜に決定ってことで。」

この類の相談は、いつもすぐに決まる。

約束の土曜日。

先に藤川とカヨちゃんを迎えに行き、その後で、祥子を拾った。

二日前まで、天気予報は、《土曜・雨》となっていた。水曜に降り出した雨が、

昨日の金曜も残っていた。それが、今朝は、カラッと晴れた。

「ねえ、見てみて。さっすが祥子ちゃんパワーでしょ。」今朝迎えに行くのと、

祥子は雲一つない空を指さした。

「でも、京都は雨かもよ。」そう言った藤川に、

「大丈夫。絶対、晴れます。雨はアキヒコの上だけに降る。」そう言って、祥子は

笑いながら、Vサインを作って見せた。

着いてみると、嵐山も、紛れもなく快晴だった。

桂川の流れが陽の光に、キラキラと輝いていた。

京都では、雨はあまり降らなかったのだろうか、いつもと大差ない、静かな流れに、

水鳥が漂っていた。ときおり水中に首を突っ込み、小魚をついばむ。小さな水しぶきがキラツツと光る。

まだ午前中で、人通りも少なく、静かな、心安まる風景が、四人を迎えてくれた。

竹かわの座敷に上がったのは、十一時半。

混雑する前に、と思つて早めに入つたが、他にはまだ一人も客はなく、女将が

一階の窓際に案内してくれた。

やはり夏場の湯豆腐屋は、それほど混雑しないのかも知れない。

「ほら、やっぱり最高のお天気になったでしょ？」祥子はそう言つて、胸を張つたが、

「やりすぎや。暑い。」藤川は汗まみれの顔で言い返した。

「わあ、スゴイ汗。まだ何も食べてないのに。」カヨがバッグから、さつとタオルを

出して、藤川の額から、顔中を丁寧に拭いた。

「あらまあ、甲斐甲斐しいこと。」祥子がそう冷やかしたが、確かに藤川とカヨは、

見ているこちらが恥ずかしくなるほど、いつも寄り添っていた。カヨが一時も、藤川から離れないというべきか。

「ああ、美味しかった。」

「うん、やっぱり竹かわは別格やな。」

「なんで、ここで食べる湯豆腐は、こんなに旨いのかなあ。」

俺は、久しぶりに味わう旨さに、感心して言った。

「旨いものに理屈はいらん。《旨い》それだけでいいんや。」

「ほーっ、何か、かつこええコメントやなあ。内容はないけど。」

「内容はないよう。」

藤川の、こんなくだらないギャグでも、祥子とカヨは、笑い転げていた。

どうも、この二人は、万事、藤川に甘い。

帰りは、先に藤川達を送り届けた。

俺と祥子は、今夜、久しぶりに、ゆっくり過ごす予定にしていた。祥子の旦那は、今日からゴルフ旅行で、日曜まで帰らない。

子供達も、それぞれ友達の家泊まりに行くから、祥子は家事から解放され、

一晩一人で過ごせるのだ。

俺は、出張 という事にした。

大阪まで戻った頃、雲行きが怪しくなってきた。

近畿道を降りる直前に、突然、激しく降り出した。

「わあ、すごい雨。前、見えてる？」祥子が心配そうに、俺をのぞき込んだ。

「うん、大丈夫。でも、すごいなあ。帰って来てからで、よかったな。」

ますます激しくなる雨の中、シティホテルの駐車場に車を入れた。こうして、朝まで過ごせるのは、あの同窓会の夜以来、わずかに二度目だった。

祥子は、シャワーの後、バスタオルを巻き、ベッドに腰掛けていた。

「灯り、消して。」

「いやだ。」

「すごく明るいよ。」

「この方が、祥子がよく見えていい。」

「ええっ、恥ずかしいよ。」

「今更、何言ってるんだよ。」

「あのさあ、もうおばさんよ。そんなに见られるもんじゃないで
しょ？」

「ううん、祥子は充分きれいだぞ。俺、祥子の身体、大好きや
か。」

「おかしな人やね、物好きやね。でも、やっぱり消して。」

俺は、諦めて、灯りを消した。スイッチを押した腕で、祥子を抱
き寄せ、

ツンと天井を向いた祥子の胸の先を含んだ。

「ありがとう。」

灰皿を手渡すと、祥子はベッドの上で身体を起こし、タバコに火
をつけた。

「カヨがね、マンション探してるんだって。」

「そうか・・・。」

俺はベッドから降り、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。

「なんか、新しい生活って感じ。ちょっと羨ましいね。」

「うん・・・そうか、どの辺りで？」

「たぶん、南。泉北か、泉大津。先週は岸和田に見に行ったって。」

「ふーん、そうか。」

「何よ、そうか、そうか、ばっかり。」

「そうか？あつ、ごめん。」

「わたし達とは立場が違うもんね。」

「ああ、でも、それ、何か、いまさらだぞ。」

「そうね、確かに、いまさらだね。」

祥子はそう言つと、タバコを揉み消した。

「ねえ、朝まで、ずっとこうしていてくれる？」

祥子が、俺の左腕に、頭をもたせかけた。

「ああ、いいよ。」

「ありがとう。」

「祥子……」

「ん？なに？」

「ゆっくり、おやすみ。」

「……うん。」

右手で髪をなでていると、祥子は目を閉じ、すぐに、静かな寝息を立て始めた。

俺は、まだしばらくは眠れそうにないと思ったが、身動きをして、祥子を起こしたり、したくはなかった。

暗い部屋で、じっと、祥子の寝息を聞いているうちに、いつの間にか、眠りに墜ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241e/>

「夢でもいいから」（続続・同窓会で逢おうね）

2010年10月17日04時33分発行